

サービス利用の工夫

快適に安心してサービスを利用したいものですが、最初は緊張したり、ちょっとした失敗が次の利用を躊躇させてしまったり、ということもあります。それに対して、事業所が出来る工夫、ご本人やご家族が出来る工夫を、いくつか紹介します。

例1. 40代、療育手帳A所持。学校を卒業してからはどこにも行かず、ずっと家で過ごしてきました。両親の高齢化、入院などをきっかけに、初めて短期入所利用するが、夜なかなか眠れずに施設内を徘徊。独り言もともなうので、本人だけでなく施設の他の利用者も睡眠不足。

対応①: 通常4人部屋だが、他の利用者の方に了解を得て居室替えをし、個室を用意。慣れるまでに個室で様子を見て、徐々に他の利用者との生活を促す。

対応②: 家で使っている寝具を施設にもって行く。

対応③: いくつかの施設と契約して順番に利用することで、各施設の負担を軽減することともに、本人を知ってくれている施設や人を増やす。

その他、本人が寝る前にすることや手に持つ物があれば、それを事業所に伝えておくという例もあります。

例2. 小学5年、療育手帳B1所持。放課後は日中一時支援、土日は別の施設で短期入所、あるいは移動支援を利用。各事業所で対応が違うためか、本人が不安定になってきた。

対応①: 本人の行動特性や好きな遊び、苦手なことなどがわかる、「プロフィールノート」を作成し、学校や各事業所に渡して読んでもらう。

対応②: 事業所どうしや学校、家族などで回覧できるノートを作成。その日その時の本人の様子や対応などを書いて引き継ぎ、情報を共有する。

対応③: 関係機関が集まって会議を開く。本人や家族の希望、また係る上での目標や対応の仕方について、みんなで一緒に確認し、所見を統一する。

これらはほんの一例です。ご本人やご家族それぞれに合った工夫を、得意な方法で検討してみましょう。事業所には、設備や人員の都合上できないこともあります。よく話し合って理解を深めることも大切です。相談室ではその工夫のお手伝いをします。ぜひ一緒に考えましょう。



「仕方なかった」とは本当? 「〇〇が言ったから」と言うなら、なぜ「違う」と否定しなかったのか? 反論しなかったこともまた、それを自分で選んだということ。選んだ自分にも責任があるんだよ。(見学)